キャリアデザイン学部

Ⅰ　2020 年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2020 年度大学評価結果総評】（参考）

キャリアデザイン学部は、ほぼすべての項目について、課題、問題点を的確に把握し、その対応策は適切かつ具体的である。2019 年度の大学評価委員会の評価結果への対応は適切であったが、今後は、年度目標達成状況報告書にて年度末に把握された課題を次年度の目標や達成指標に盛り込むことが望まれる。2017 年のカリキュラム改編により、学部の理念や目的に合致したカリキュラムの体系性、順次性、階梯性の整備は適切かつ順調に進んでいる。学部の特色である体験型学習は、教員の業務負荷など継続的な課題は残るものの、学外の企業や NPO、地域団体、高等学校などと協働した「キャリア体験学習（国際）」や「キャリアサポート実習」「地域学習支援」など、高い学習効果を得ており、高く評価できる。また、学習の成果は教員に共有され、組織的に改善・検討が適切になされており、1 学科学部であるキャリアデザイン学部の機動性は高く評価できる。本学の中小規模学部を牽引する存在となることを期待したい。

【2020 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

本学の中小規模学部を牽引する存在としてしっかりと位置づくことを目ざして、引き続き学部のサイズや教員組織の特性を生かし、機動力と柔軟性を具えた学部運営に努めていきたい。そのため、恒例の年３回の FD ミーティング（春・秋・冬）をいっそう充実させ、①カリキュラム関係、②学部内委員会活動のふたつのテーマにそって、より細やかな課題の把握と速やかな対応策の検討を推し進めていくこととする。このたびの総評において、「年度目標達成状況報告書」で浮かび上がった諸課題を次年度の目標や達成指標に盛り込むようご指導いただいたことを踏まえ、2021 年度の年度目標では、項目を整理してより明快かつ具体的な記述を心がけている。学部の特色として高く評価していただいている体験型学習については、2020 年度はコロナ禍により大幅な実施内容の変更を余儀なくされたが、(海外を含め) 学外のさまざまな組織・団体とのオンラインを通じた協働の可能性を探る貴重な機会ともなった。2021 年度も依然として予断を許さない状況にあるが、ウェブ上での学習成果の公開をはじめ、さらに効果的なオンライン活用の方策について検討していくこととしたい。

【2020 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

キャリアデザイン学部に対しての、「2020 年度大学評価結果総評」は概ね高い評価であり、1 学科であるキャリアデザイン学部の機動性が十全に発揮されていることが見てとれる。「2020 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況」には、学部としてこうした高評価にあぐらをかくことなく、学部の長所をさらに伸ばすべく積極的な取り組みを引き続き行なっていくことが謳われており、今後の着実な実行に期待したい。一方、「2020 年度大学評価結果総評」では、年度目標達成状況報告書に記載された課題や問題点を次年度の目標や達成指標に盛りこむことが望まれるとの指摘がなされているが、これについては、2021 年度の年度目標において、前年度からの連続性に留意した明快かつ具体的な目標設定が行なわれており、適切な対応として評価できる。

Ⅱ　自己点検・評価

1　教育課程・学習成果

【2021 年 5 月時点の点検・評価】

（1）点検・評価項目における現状

1.1　教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	
①学生の能力育成のため、教育課程の編成・実施方針に基づいた教育課程・教育内容が適切に提供されていますか。	S　[A]　B

※教育課程の編成・実施方針との整合性の観点から、学生に提供されている教育課程・教育内容の概要を記入。

本学部では、①自己のキャリアを主体的にデザインすることができる能力の涵養と、②他者のキャリアのデザインや再デザインの支援を行うことができる専門性の習得、というふたつの教育目標に基づいて教育課程の編成・実施方針を定め、それにしたがって適切な教育内容を提供できるよう科目を配置している。2017 年度に完成させた「カリキュラムマップ」では、学部のディプロマポリシーを

土台に８つの「学習の目標」を掲げ、各々の科目がそのいずれを目ざしているのか明示するとともに、同年作成した「カリキュラムツリー」によって、各科目がどの年次にどのような関連性をもって配置されているのかを図示している。基本的には、１年次に「キャリアデザイン学入門」をはじめ入門系の科目によって基礎的な知識や調査スキルを学び、２年次以降に「発達・教育キャリア」「ビジネスキャリア」「ライフキャリア」の３つの領域にそって専門性を深めていくととも

※注１　回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
※注２　回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

に、２年次秋学期から始まる「演習（ゼミ）」において問題意識を掘り下げ、４年次の卒業論文執筆や「キャリアデザイン学総合演習」で総括するという構成になっている。その一方で、２年次以降に履修できる体験型科目（選択必修）では、企業、NPO、学校など、学外の多様な現場での体験学習を通して、自己と他者のキャリア形成について実践的に理解・学習し、その成果を教室での学びに還元させている。

【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でＳを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

【根拠資料】※カリキュラムツリー、カリキュラムマップの公開ホームページＵＲＬや掲載冊子名称等

・2021 年度「キャリアデザイン学部履修の手引き」pp. 5-34.
https://hosei-hondana.actibookone.com/
・キャリアデザイン学部ホームページ「カリキュラム」(カリキュラムマップ、カリキュラムツリーのページを含む)
https://www.hosei.ac.jp/careerdesign/shokai/curriculum/
・2021 年度「キャリアデザイン学部パンフレット」pp. 4-5.
https://edu.career-tasu.jp/p/digital_pamph/frame.aspx?id=3942400-0-11

②学生の能力育成の観点からカリキュラムの順次性・体系性を確保していますか。　S　[A]　B

※カリキュラム上、どのように学生の順次的・体系的な履修（個々の授業科目の内容・方法、授業科目の位置づけ（必修・選択等）含む）への配慮が行われているか。また、教養教育と専門科目の適切な配置が行われているか、概要を記入。

本学部においては、教養教育と専門教育を明確に切り分けて段階的に学修していくのではなく、互いに相乗効果を生み出すことを期して、１年次より市ヶ谷基礎（ILAC）科目に加えて、多くは必修・選択必修からなる専門科目を「基幹科目」として設置している。それらを通してキャリアデザインに関する基礎的な理解と幅広い視野を形成したのち、２年次以降は学生各自の関心にしたがって、「発達・教育キャリア」「ビジネスキャリア」「ライフキャリア」の３つの領域のいずれかを軸に、それぞれの領域に対応した「展開科目」および「演習（ゼミ）」の履修によって専門的な学びを進めていく。４年次には、「卒業論文」や「キャリアデザイン学総合演習」を通して学部での学びの集大成を行う。このように、共通→分化→統合という流れにそってカリキュラムを設計することにより、学修の順次性・体系性を確保している。また、専門科目群と並行して、３つの領域を横断するかたちで、本学部の大きな特色である選択必修の体験型科目群を置き、理論のみならず実践的な観点からキャリアデザインにアプローチする仕組みを設け、知識と体験の統合を図っている。なお、キャリアデザインをめぐる研究に必要な方法論の習得については、2017 年度より、「キャリア研究調査法入門」（１年次必修）→「キャリア研究調査法（質的／量的）」（２年次選択必修）→「キャリア研究調査法実習」（展開科目）という具合に科目の順次性・階梯性を整え、最終的に演習や卒業論文における研究に生かせるよう配慮している。

【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でＳを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・2021 年度「キャリアデザイン学部履修の手引き」pp. 5-34.
https://hosei-hondana.actibookone.com/
・キャリアデザイン学部ホームページ「カリキュラム」
https://www.hosei.ac.jp/careerdesign/shokai/curriculum/
・2021 年度「キャリアデザイン学部パンフレット」pp. 4-5.
https://edu.career-tasu.jp/p/digital_pamph/frame.aspx?id=3942400-0-11

③幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する教育課程が編成されていますか。　S　[A]　B

※カリキュラム上、どのように教養教育等が提供されているか概要を記入。

キャリアデザインが求められるようになった歴史的・社会的背景を幅広く理解したり、社会の諸課題を主体的に発見し、それに対する解決方法を探っていくうえで必要な思考力や発信力を養うために、１年次より、人文科学や社会科学、情報科学等からなる市ヶ谷基礎（ILAC）科目と、学部の専門科目とをバランスよく履修し、総合的な力を身につけることができるよう教育課程を編成している。また、豊かな人間性の涵養においては、教室での学びだけでなく学内外で多様な人びとと協働することが非常に有効であることから、体験型の授業を重視し、丁寧な事前指導・事後指導と合わせて体験学習の成果をより高めるよう配慮している。

【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でＳを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・2021 年度「キャリアデザイン学部履修の手引き」pp. 5-34.

https://hosei-hondana.actibookone.com/

④初年次教育・高大接続への配慮は適切に行われていますか。	S　A　B

※初年次教育・高大接続への配慮に関し、どのような教育内容が学生に提供されているか概要を記入。

初年次教育については、市ヶ谷基礎（ILAC）科目の「基礎ゼミ」（必修）において、高大接続がスムーズに行われるよう配慮しつつ、大学での学びに必要なアカデミックスキルの習得を促している。全新入生が等しく確実に学修できるよう、各クラス 20 名以下の少人数に抑え、標準シラバスにそって共通テキストを用いて丁寧に指導している。また、１年次から学部の専門科目（基幹科目）として「キャリアデザイン学入門」や「キャリア研究調査法入門」（いずれも必修）等の入門系科目を配置し、２年次以降の専門への導入に位置づけている。一方、グローバル化に伴う外国語習得の必要性やデータサイエンスの重要性の高まりから、市ヶ谷基礎（ILAC）科目の外国語科目や「情報処理演習」の積極的な履修が望まれるものの、学生たちの関心が必ずしも高くない現状を踏まえ、新入生ガイダンス等の機会により強力なアピールを試みているところである。なお、付属校および指定校推薦による入学予定者に対しては、高校３年の３学期対応として、学部の全教員から推薦図書を募り、大学での学びにそなえて事前に学習しておくよう指導している。

【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でＳを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・2021 年度新入生ガイダンス資料「英語ガイダンス」（2021 年 4 月 1 日）
・2021 年度第１回 FD ミーティング資料「基礎ゼミ」（2021 年 4 月 9 日）
・2021 年度新入生向け推薦図書リスト

⑤学生の国際性を涵養するための教育内容は適切に提供されていますか。	S　A　B

※学生に提供されている国際性を涵養するための教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。

学生の国際性を涵養するために、語学力・知識・体験の３点に留意して科目を配置している。語学力については、市ヶ谷基礎（ILAC）科目の英語・諸語科目に加え、学部の関連科目としてネイティブの講師による少人数制の「国際コミュニケーション語学」を複数コマ置いているほか、３つの専門領域（発達・教育キャリア／ビジネスキャリア／ライフキャリア）のそれぞれに対応した「外書講読」を２コマずつ用意している。また国際社会に関する知識や理解を深めるために、学部の展開科目として「国際経営論」「国際地域研究」「多文化社会論」といった科目を配置している。「演習（ゼミ）」においても、英文ジャーナルをテキストに用いたり、オンラインで諸外国の人びとと交流する活動を実践しているクラスが少なくない。海外での体験を促すために、「キャリア体験学習（国際）」ではベトナムと台湾、「SA（スタディ・アブロード）」ではオーストラリアとニュージーランドに滞在し、現地の生活文化を学んだり、海外企業でインターンシップを行うプログラムを提供している。2020 年度はコロナ禍のため海外渡航は中止を余儀なくされたが、都内の関連施設を訪問したり、オンラインで現地の学生や企業と交流する等の工夫を行った。なお、国際性を具えた多様な学生を受け入れるために、外国人留学生の枠に加え、国際バカロレア利用自己推薦やグローバル体験公募推薦、海外高校や日本語学校の指定校推薦など、様々な入試形態を導入している。

【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でＳを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・2021 年度「キャリアデザイン学部履修の手引き」（「留学」pp. 65-67.）
https://hosei-hondana.actibookone.com/
・「2020 年度キャリア体験学習（国際・ベトナム）報告書」
・「2020 年度キャリア体験学習（国際・台湾）報告書」

⑥学生の社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を育成するキャリア教育は適切に提供されていますか。	S　A　B

※学生に提供されているキャリア教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。

本学部の理念そのものが、自己および他者のキャリア形成をめぐる様々な課題に主体的に取り組むことを目ざしていることから、すべての専門科目がキャリア教育としての性質を帯びているといえる。１年次より、「キャリアデザイン学入門」をはじめとする入門系の科目を通して「キャリアデザイン」という考え方の土台を形成するとともに、「ライフコース論」や「職業選択論」、「若者の自立支援」、「キャリアモデル・ケーススタディ」といった基幹科目の履修によって、早くから社会的・職業的自立に向けての意識を涵養するよう促している。また２年次以降に履修できる体験型科目群は、企業や NPO など社会の多様な場でのキャリアのあり方を具体的に経験することにより、学生自身の将来のキャリア設計について大きな示唆を得る機会となっている。一方、学部の就職委員会を中心に、例年秋学期に、主として３年生を対象に様々な就職

支援プログラムを提供している。2020 年度はコロナ禍のため、企業人との交流会のような対面の企画は実施できながったが、「シュウカツ・ラジオ」と題して、就活に関わる情報や社会人ゲストの講話をオンラインで発信した。こうしたイベントの多くは、学部所属の専門スタッフであるキャリアアドバイザー５名の協力のもとに実施されるが、アドバイザーは学生からの個別の相談にも応じ、丁寧な面談を通して就活生の支援を行っている。なお、本学部では独自の「キャリアアップ奨励金制度」を設け、学部の趣旨に合致した資格試験の受験料や講座の受講料を補助している。

【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でＳを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・2021 年度第１回 FD ミーティング資料「就職委員会」（2021 年 4 月 9 日）
・「富士見坂シュウカツ・ラジオ」フライヤー
・2021 年度第１回 FD ミーティング資料「キャリアアドバイザー制度運営委員会」（2021 年 4 月 9 日）
・2021 年度「キャリアデザイン学部履修の手引き」（「キャリアアップ奨励金制度」p. 80.）

1.2　学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。

①学生の履修指導を適切に行っていますか。	S　[A]　B

【履修指導の体制及び方法】※箇条書きで記入。

◎１年次
・「新入生ガイダンス」において、教務委員会、英語担当教員、キャリアアドバイザーを中心に、大学における学びの特徴や履修上の諸注意について詳細な指導を行っている。2021 年度春は複数教室を用いて対面で実施したほか、関連資料を学部の掲示板にアップして周知を図った。
・キャリアアドバイザー制度運営委員会の主催で、毎年４月に、学部の上級生がピアサポーターとなって「履修相談会」を開催し、個別具体的なサポートが新入生から好評を得ている。2020 年度はコロナ禍によりウェブ上での資料配信にとどまったが、2021 年度は対面で実施して多くの参加者を得た。
・春学期開講の「基礎ゼミ」（必修）において、キャリアデザイン学部で学ぶことの意義やビジョンを理解するよう指導している。

◎２年次
・前年３月末に、学部の体験型主任を中心に「体験型科目履修ガイダンス」を実施し、各科目の実習内容や選考プロセスについて、配布資料をもとに詳細な履修指導を行っている。2021 年度の履修については、コロナ禍のためオンラインによるガイダンスに切り替え、併せて関連資料を学部掲示板に載せて周知を徹底させた。また、全体験型科目の実習報告書を公開し、履修科目を選ぶ際の参考となるよう配慮している。
・毎年５月に、教務委員会の主導で「ゼミ履修ガイダンス」を実施し、秋学期からのゼミ履修にそなえて詳細な指導と情報提供を行っている。また、毎年年度末に実施する「学生研究発表会」の要旨集も併せて公開し、学生のゼミ選びの参考に資するよう配慮している。2021 年度は、コロナ禍のため対面のガイダンスは中止し、代りに「ゼミ履修の手引き」をはじめ各種資料を学部掲示板に載せたほか、動画「ゼミ履修のツボ」を配信して履修指導の補強を図った。

◎その他
・キャリアアドバイザーが随時、全学年の学生に対して個別に相談を受け付け、履修指導や学習のサポートに当たっている。
・各ゼミの担当教員が、それぞれのゼミの研究テーマに即した展開科目や関連科目の履修を促すことにより、専門性を深めていくための履修指導を行っている。

【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でＳを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・2021 年度「キャリアデザイン学部履修の手引き」（「専門科目の紹介及び履修上の注意」pp. 23-27.）
https://hosei-hondana.actibookone.com/
・「2021 年度新入生ガイダンス」資料（「英語ガイダンス」資料含む）」
・「2021 年度体験型科目履修ガイダンス」資料
・「2021 年度ゼミ履修の手引き」
・動画「ゼミ選択のツボ」https://www.youtube.com/watch?v=Q20S1JaohKY
・「第 15 回学生研究発表会報告要旨集」
・「2020 年度キャリアサポート実習成果報告書」

・「2020 年度キャリア体験学習報告書」
・「2020 年度キャリア体験学習（国際）報告書」（ベトナム／台湾）
・「2020 年度地域学習支援報告書」

②学生の学習指導を適切に行っていますか。　S　[A]　B

※取り組みの概要を記入。

「キャリアデザイン学入門」をはじめ、学部の基幹的な科目の多くを原則として専任教員が担当することにより、学生に向けてより直接的・継続的な学習指導が行えるよう配慮している。基礎能力の習得を目ざす「基礎ゼミ」や「キャリア研究調査法」、英語科目等については、学修の徹底を期して少人数クラスを複数コマ展開していることから、かなりの部分を兼任教員に委ねざるをえない状況にあるが、それぞれの科目の担当責任者として専任教員を配置し、授業の運営方法、課題内容、成績評価の基準などについて情報の共有を行い、均質な学習指導を実践するよう努めている。とりわけ英語科目は、兼任教員の割合が著しく大きく、また ILAC 英語分科会の方針とのすり合わせも必要なため、学部内の英語担当教員（１名）に多大な負荷がかかっている。俄かに改善することは難しいものの、今後も様々な機会をとらえて、学部の他の教員の協力も得て英語学習の推進に努めていくこととしたい。なお、本学部では大半の学生がゼミに所属しており（2020 年度は約 86%）、担当教員が個々のゼミ生に対して丁寧な学習指導を行っているが、一方でゼミに所属していない学生には十分目が届かない可能性がある。そこで、ゼミを履修していない学生（任意）および成績不振（並びに留級・卒業保留）の学生（必須）については、キャリアアドバイザーが個別に面談し、学修の支援に当たっている。加えて 2020 年度には、コロナ禍のため学生たち、とりわけ新入生の登校機会が大きく削がれたため、9 月にオンラインイベント「１年生の集い」、12 月には「キャリアデザイン Café」を開催して大学での学びに馴染めるよう配慮した。

【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でＳを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・「2020 年度キャリアデザイン学部内部質保証・自己点検チェックシート」（「FD 活動」「主要科目」の各項目）
・2021 年度第一回 FD ミーティング資料「キャリアアドバイザー制度運営委員会」（2021 年 4 月 9 日）
・2021 年度第一回教授会資料（資料番号 B02）「2021 年度成績不振者面談の基準について」

③学生の学習時間（予習・復習）を確保するための方策を行なっていますか。　S　[A]　B

※取り組みの概要を記入。

学生が授業時間以外にも予習・復習等のために十分な学習時間を確保するよう、シラバスにおいて各々の授業について「準備学習・復習時間は各２時間を標準とする」旨を記載するとともに、具体的にどのような自主学習が必要か、できるだけ明確に示すよう努めている（例えば学期末の成果発表会に向けて準備作業に一定時間を要する、ゲスト講師の回には必ず下調べを行う、等）。また 2021 年度からは、学習の成果をより推し量りやすくするために、教員からのフィードバックのやり方をシラバスに明記している。「基礎ゼミ」をはじめ複数コマ展開の科目では、課題の内容や量について予め統一的な方針を定めておくことで、クラス間に学習の差が生じないよう気を配っている。本学部では、２年次の秋学期以降、「演習（ゼミ）」が専門の学びの中心を占めることになるため、フィールド調査やプレゼンテーションの準備など、授業時間外に相当の学習量が要求される。多くのゼミは、正規の時間外に「サブゼミ」を開設し、学びの深化を図るとともに学習の習慣づけに大きく寄与している。

【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でＳを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・2021 年度キャリアデザイン学部 Web シラバス
https://syllabus.hosei.ac.jp/web/show.php?gakubueng=AM&t_mode=pc
・「2021 年度ゼミ履修の手引き」

④教育上の目的を達成するため、効果的な授業形態の導入に取り組んでいますか。　S　[A]　B

【具体的な科目名及び授業形態・内容等】※箇条書きで記入（取組例：PBL、アクティブラーニング、オンデマンド授業等）。

・「基礎ゼミ」をはじめ、授業の多くでアクティブラーニングの要素を取り入れ、受け身の講義にとどまることなく、グループワークやディスカッション、プレゼンテーション等の機会をできるだけ設け、能動的な学習への取り組みを促している。
・本学部では、「人の生き方＝キャリア」に主体的に関わっていくことができる人材の育成を目ざしているため、キャリアをめぐる社会の様々な課題について具体的に理解する機会として、体験型科目群（「地域学習支援」「キャリアサポート実習」「メディアリテラシー実習」等）や「演習（ゼミ）」をはじめ、PBL を強く意識した授業を数多く展開している。

・学部独自の制度として、毎年「学生活動サポートプログラム」と題する助成を行っており、主としてゼミ単位で、学外の様々な団体やコミュニティと協働しながら他者のキャリア形成の支援を実践する活動を推進している。
・毎年１月末に、３・４年生を中心に学習の成果発表として「学生研究発表会」を開催し（4 年生は参加必須）、アカデミックな形式に則ったプレゼンテーションを実践する機会を設けている。併せて「卒論要旨集」も作成し、学生たちの学びの成果を公開・共有している。2020 年度はコロナ禍のためオンラインで発表会を実施したところ、より参加しやすいとの反応が多かったため、今後も開催形式については工夫と検討を重ねていく予定である。

【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でＳを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・「2021 年度体験型科目履修ガイダンス」資料
・「2021 年度ゼミ履修の手引き」
・「第 15 回学生研究発表会報告要旨集」（2021 年 1 月）
・法政大学キャリアデザイン学会紀要『生涯学習とキャリアデザイン』vol. 17-2（2020 年 3 月）、「学生活動サポート奨励金とその報告」
http://cdgakkai.ws.hosei.ac.jp/wp/wp-content/uploads/2020/07/17-2-12.pdf

⑤それぞれの授業形態(講義、語学、演習・実験等)に即して、1 授業あたりの学生数が配慮されていますか。

S　A　B

※どのような配慮が行われているかを記入。

初年次教育の中心をなす「基礎ゼミ」（必修）、キャリア研究の基本的スキルを学ぶ「キャリア研究調査法（質的／量的）」（２年次選択必修）、実習を通して研究手法を身につける「キャリア研究調査法実習」等の科目は、１クラス 20 名程度の少人数に抑える代りに複数コマを展開し、きめ細かな指導ができるよう配慮している。また２年次以降に履修できる体験型科目群については、実習の受け入れ先の状況に即して各コースに 10～50 人弱の定員を設け、キャリアアドバイザーの協力も得つつ事前／事後指導の徹底を図っている。２年次の秋学期から始まる「演習（ゼミ）」に関しては、応募者数の偏りを是正するために各ゼミ（各学年）11～12 名程度を基準とし、三次募集まで設けることにより、できるだけ多くの学生に学習機会を提供するよう努めている。市ヶ谷基礎（ILAC）科目の必修英語については、2018 年にようやく１クラス 24 人定員が実現したが、各クラスのレベルや授業内容の妥当性については引き続き検討を重ねていくこととしたい。

【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でＳを選択した場合に具体的な内容を記入。

2020 年度には、体験型科目群に関して、学部のカリキュラムにおける位置づけをより明確にし、実習内容や評価基準の不均衡を是正するとともに、該当科目や定員の見直し等を図ることを目的として、体験型主任を中心に科目の担当教員たちによるワーキンググループが立ち上げられて議論を重ねた。協議の結果まとめられた改善案については、同年度末までに学部教授会の合意が得られ、2022 年からの運用に向けて準備を開始したところである。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・「2021 年度新入生ガイダンス」資料
・「2021 年度体験型科目履修ガイダンス」資料
・「2021 年度ゼミ履修の手引き」
・2020 年度第 14 回教授会資料（資料番号 B06）「体験型ワーキング」（2021 年 2 月 26 日）

⑥通常の教育課程や教育方法に加え、COVID-19 への対応・対策として、教育内容、教育方法、成績評価等の一連の教育活動において工夫を講じていますか。行っている場合はその内容と教育活動の効果について教えてください。

※取り組みの概要を記入。

2020 年度の「年度目標」のひとつとして、授業のオンライン化に適切に対応するために、教務委員会を中心に状況を把握し、授業の質保証に努めていくことを掲げた。これに基づき、年度はじめより、学部教員のグループウェアであるサイボウズ上で、オンライン授業に関連したツールの紹介や授業実施上の工夫等について情報共有を行った。また秋学期はじめの第２回 FD ミーティングでは、春学期の授業経験（特に大規模クラス）で得た気づきや課題を教員間で共有した。さらに 11 月には、学部の自己点検・質保証委員会により、1～4 年生の学生 10 名強を対象にモニター調査を実施し、結果を速やかに教授会で報告・共有した。それを受けて、とりわけ新入生の孤立感の問題に対処すべく、12 月にはキャリアアドバイザーを中心に対面式で 1 年生対象の「キャリアデザイン Café」を開催したほか、12 月～翌年 1 月にかけて、オンラインの「演習（ゼミ）」を 1 年生が見学することができる仕組みを作り、多数の参加者があった。一方、英語科目や基礎ゼミ、キャリア研究調査法関連の授業など、多くの兼任教員を含む複数コマ展開の科目においては、授業の実施方法や成績評価に関して専任と兼任のあいだで密に連絡を取り合い、結果的に大きな混乱なく授業が遂行できた。但し、学部の基幹的な科目である「基礎ゼミ」については、2021 年度より授業形態を統一（原則として対面）することとなった。なお、学外で

の実習を主目的とする体験型科目群に関しては、「キャリアサポート実習」のように現地（中学・高校）で実習ができたコースもあったものの、多くはオンラインを通じて企業や海外の大学生と交流するなど、コロナ禍においても授業の質を維持するために様々な工夫を行った。学部が提供する学外プログラムの中では、「SA（スタディ・アブロード）」のみ完全中止となったが、今後はSA委員会を中心に、コロナ禍でも可能な学修の方策を探っていく予定である。2021年度も引き続き、年度の重点目標として「オンラインと対面の併用における教育の質保証」を掲げ、より具体的な対策のひとつとして、教務委員会の中にオンライン担当委員（主副２名）を新たに設け、教育活動上の様々な課題の把握・対応に当たるとともに、中長期的にオンラインというツールをどのように活用していくかについても検討を始めたところである。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・「2020年度中期目標・年度目標達成状況報告書」
・「2021年度中期目標・年度目標」
・2020年度第２回 FDミーティング資料「2020 年度秋学期に向けて」（2020年９月18日）
・2020年度第11回教授会資料（資料番号B02）「学生に対するモニター調査の概要とインプリケーション（速報）」（2020年11月27日）
・「2020年度キャリアデザイン学部内部質保証・自己点検チェックシート」
・2021年度第２回執行部会議資料「オンライン担当メモ」（2021年４月23日）

1.3　成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。

①成績評価と単位認定の適切性を確認していますか。　S　[A]　B

【確認体制及び方法】※箇条書きで記入。

・進級に関する規程、および早期卒業に関する規程を定めて公開している。
・学部の平均GPAについては、執行部より教授会で提示され、その妥当性が検証されている。特にS（旧A⁺）評価の扱いについては厳密化を図り、講義科目においては受講生の15%以内に収めることを申し合わせている。
・「基礎ゼミ」（必修）をはじめ複数コマ展開の科目においては、成績評価の基準にばらつきが出ないよう、それぞれの科目担当責任者の教員によって周知が図られている。
・体験型科目群の各コースについては、単位認定に要する実習時間のばらつきを抑えるために、ある程度の共通ルールを設けた上で、細部については実習内容の多様性に鑑みて各担当教員の判断に委ねている。

【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でＳを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・2021年度「キャリアデザイン学部履修の手引き」（「進級に関する規程」p. 7、「早期卒業について」p. 69）
・2021年度第１回FDミーティング資料「基礎ゼミ」（2021年４月９日）
・2020年度第14回教授会資料（資料番号B06）「体験型ワーキング」（2021年２月26日）

②厳格な成績評価を行うための方策を行っていますか。　S　[A]　B

※取り組みの概要を記入。

2013年度まで、学部主催科目の平均GPAが他学部に比べて相当に高くなっていたため、学部内で検討した結果、S（当時のA⁺）評価が多めに出されていることが明らかとなり、一定規模（受講生50名以上）の講義授業においては、S（旧A⁺）評価の割合を15%以内に収めることとし、GPAの偏りが是正された。また基礎ゼミ（必修）や体験型科目（選択必修）については、学部の主要科目であり、かつ少人数による演習ないし実習の形式による授業であることから、出席に関する厳格なルールを設け、単位認定に反映させている。

【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でＳを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・2021年度第１回FDミーティング資料「基礎ゼミ」（2021年４月９日）
・2020年度第14回教授会資料（資料番号B06）「体験型ワーキング」（2021年２月26日）

③学生の就職・進学状況を学部（学科）単位で把握していますか。　[はい]　いいえ

※データの把握主体・把握方法・データの種類等を記入。

学生の就職・進学状況については、キャリアセンターから提供された卒業生の進路データをもとに、学部の就職委員会を中心に実態を分析し、その結果を教授会で共有している。併せて、同委員会およびキャリアアドバイザーによる様々な就活支援プログラムの企画にも役立てている。なお、毎年の進路データについては、学部のパンフレットを通じて公開している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・2021 年度「キャリアデザイン学部パンフレット」(「卒業後のキャリアデザイン」pp. 21-22.)
https://edu.career-tasu.jp/p/digital_pamph/frame.aspx?id=3942400-0-11

・2021 年度第 1 回 FD ミーティング資料「就職委員会」(2021 年 4 月 9 日)

1.4　学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。

①成績分布、進級などの状況を学部（学科）単位で把握していますか。	[はい]　いいえ

※データの把握主体・把握方法・データの種類等を記入。

成績分布や進級の状況については、主に学部教授会において実態を把握・共有し、留級・卒業保留者および学業成績不振者については、キャリアアドバイザーによる面談を実施している。面談による指導を徹底させるために、学生への呼びかけや督促の手順を明確化している。また、選択必修の体験型科目については、前年に単位を取得することができなかった学生を優先的に履修させるなど、取りこぼしの無いよう配慮している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・2021 年度第 1 回 FD ミーティング資料「キャリアアドバイザー制度運営委員会」(2021 年 4 月 9 日)

・2021 年度第 1 回教授会資料（資料番号 B02)「2021 年度成績不振者面談の基準について」

②「学修成果の把握に関する方針（アセスメント・ポリシー)」に基づき、分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標の適切な設定または取り組みが行われていますか。	S　[A]　B

※取り組みの概要を記入。

2017 年度に完成させた「カリキュラムマップ」において、「キャリアデザインが求められる社会的背景や歴史、現状などについて、専門的な深い知識を習得する」「キャリアデザインに関わる社会現象や政策・施策などについて、客観的に観察できる態度と能力を獲得する」など、学部の特性を反映した具体的な学習目標を８項目設定し、各々の科目が到達すべき目標を明確にしている。また、ほとんどのゼミにおいて、4 年間の学びの集大成として卒業論文の執筆を義務づけているが、その質や量（2 万字以上）が一定の水準を満たすよう、ゼミ担当教員による指導を徹底している。

【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でＳを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・キャリアデザイン学部ホームページ「カリキュラム」(カリキュラムマップのページを含む)
https://www.hosei.ac.jp/careerdesign/shokai/curriculum/

③「学修成果の把握に関する方針（アセスメント・ポリシー)」に基づき、具体的な学習成果を把握・評価するための方法を導入または取り組みが行われていますか。	S　[A]　B

※取り組みの概要を記入。取り組み例：アセスメント・テスト、ルーブリックを活用した測定、学習成果の測定を目的とした学生調査、卒業生・就職先への意見聴取、習熟度達成テストや大学評価室卒業生アンケートの活用状況等。

体験型科目群の一部の科目において、学部で開発した効果測定法である CATV（Career Action Vision Test）を用いて、体験学習の成果を検証している。ほかの体験型科目についても、成果報告書の作成や学内外でのポスター発表を通して、学びの成果を測ることができる仕組みを設けている。また SA（スタディ・アブロード）では、例年、帰国後に英語によるプレゼンテーションを実施して成果を報告しているが、2020 年度はコロナ禍のため渡航自体が中止された。毎年 1 月末に開催している「学生研究発表会」では、複数の教室を会場として、個人またはグループによる 40 件を超える研究発表が行われ、学生同士による質疑応答に加え、各会場において複数の教員が講評を担当している。2020 年度はコロナ禍によりオンラインでの開催となったが、複数の Zoom 会議室を設定し、大きな混乱もなく実施することができた。またこの機会に、ウェブを活用して初めてアンケートを実施し、発表会に参加した学生たちが具体的にどのような気づきや学びを得たのかを把握した。

【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でＳを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・「2020 年度キャリアサポート実習成果報告書」

・「2020 年度キャリア体験学習報告書」

・「2020 年度キャリア体験学習（国際）報告書」(ベトナム／台湾)

・「2020 年度地域学習支援報告書」

・2020 年度第 15 回教授会資料（資料番号Ｂ09)「2020 年度学生研究発表会実施アンケート報告」

・「第 15 回学生研究発表会報告要旨集」(2021 年 1 月)

④学習成果を可視化していますか。	S　[A]　B

※取り組みの概要を記入。取り組み例：専門演習における論文集や報告書の作成、統一テストの実施、学生ポートフォリオ等。

学部のカリキュラムの重要な柱の一つとなっている体験型科目群においては、基本的にすべてのコースについて年度末に成果報告書を作成し、関係先に配布するとともに学内で閲覧できるようにしている。特に「キャリア体験学習（国際）」に関しては、今後ウェブ上でより広く公開していくことを検討しているが、2020 年度はコロナ禍によりイレギュラーな実習形態となったため、コロナ後を見すえて準備を進めているところである。また、同科目に加えて「地域学習支援」のコースでも、例年、ポスター発表を行い、外部からのフィードバックが得られる仕組みを作っている。「キャリア体験学習 C」コースでは、協働してプロジェクトを実施してきた外部企業に向けて成果報告会を開いている。一方、毎年１月末には、外部からの聴衆も交えて「学生研究発表会」を開催し、３・４年生を中心に、卒業論文や「学生活動サポート助成」による活動の成果などを発表する場を設けている。個々のゼミの枠を越えて、他の学生がどのような活動や研究を行っているのかを知り、様々な知的刺激を得ることができる貴重な機会となっている。なお、この発表会に合わせて、発表要旨のみならず卒論要旨も掲載した冊子を作成し、学部内で公開している。こうした学習成果の「見える化」は、教員たちにとっても、教育成果の向上に対する意識の涵養につながっている。

【2020 年に変更や改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でＳを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・「2020 年度キャリアサポート実習成果報告書」
・「2020 年度キャリア体験学習報告書」
・「2020 年度キャリア体験学習（国際）報告書」（ベトナム／台湾）
・「2020 年度地域学習支援報告書」
・2020 年度第 15 回教授会資料（資料番号Ｂ09）「2020 年度学生研究発表会実施アンケート報告」
・「第 15 回学生研究発表会報告要旨集」（2021 年１月）

1.5　教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みも行っているか。

①学習成果を定期的に検証し、その結果をもとに教育課程及びその内容、方法の改善・向上に向けた取り組みを行っていますか。	S　[A]　B

※検証体制及び方法、改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。

学部の創設（2003 年）以来、ほぼ４年に一度、全体的なカリキュラムの見直しを行い、より適切な教育課程の構築に向けて議論や改善を重ねてきた。「発達・教育キャリア」「ビジネスキャリア」「ライフキャリア」の３領域からなる現在のカリキュラムの大枠は 2011 年度に定められ、その後も新たな課題が見いだされるたびに微調整を加え、2017 年度にかなり大がかりな改編を実施した。授業の運営に関わる様々なことがらについては、教務委員会（上記３領域の教員に加え、体験型主任、英語担当教員、キャリアアドバイザー１名を含む）が中心となって対応・改善に当たっている。また、教育課程や学習成果の検証に関しては、毎年、年度末に、FD 活動と主要科目について、それぞれの担当者からの報告を「キャリアデザイン学部内部質保証・自己点検点チェックシート」にまとめ、学部自己点検・質保証委員会が客観的な観点からそれらの点検・評価を行い、必要に応じて改善点を教授会や FD ミーティングで指摘している。同委員会は、毎年秋学期に、その年度の重要課題について学生からの聞き取り調査も実施し、結果を速やかに報告している。2020 年度のモニター調査では、コロナ禍に伴う授業のオンライン化をめぐる諸課題を洗い出し、具体的な施策を教授会で提案した。なお本学部では、年度はじめ、秋学期開始時、年度末の合計３回、キャリアアドバイザーも同席して FD ミーティングを開催している。その折に、「基礎ゼミ」や入門系科目、キャリア研究調査法関係科目、体験型科目等、主要な科目について、それぞれの代表担当教員から授業状況を報告してもらい、情報共有と意見交換を行うことによって次の改善につなげるというサイクルを形成している。また、コロナ終息後に予定している次のカリキュラム改革を視野に入れつつ、「発達・教育キャリア」、「ビジネスキャリア」、「ライフキャリア」のそれぞれの領域において、授業内容の確認や科目の整理といった作業に着手したところである。

【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でＳを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・「2020 年度キャリアデザイン学部内部質保証・自己点検チェックシート」
・「2020 年度中期目標・年度目標達成状況報告書」
・2020 年度第 14 回教授会資料（資料番号 B06）「体験型ワーキング」（2021 年 2 月 26 日）

・2020 年度第 11 回教授会資料（資料番号 B02）「学生に対するモニター調査の概要とインプリケーション（速報）」（2020 年 11 月 27 日）
・2020 年度第１～３回 FD ミーティング資料（2020 年 4 月 10 日、9 月 18 日、2021 年 2 月 26 日）
・2021 年度第１回 FD ミーティング資料「2021 年度に向けて」（2021 年 4 月 9 日）

②学生による授業改善アンケート結果を組織的に利用していますか。	S [A] B

※利用方法を記入。

例年、教育開発・学習支援センターから「学生による授業改善アンケート」の集計結果の提供を受けたのち、教授会においてその概要を執行部から説明するとともに、学部のグループウェアであるサイボウズ上でデータを共有し、各教員が具体的に授業改善に役立てていくよう促している。2020 年度は、第７回教授会（2020 年 9 月 18 日）においてアンケート結果についてのコメントがなされ、併せて、全学で実施された「オンライン授業に関する学生対象調査」の結果についても報告され、コロナ禍における課題の共有を行った。また毎年、授業改善アンケートの結果から得られた気づきや改善計画を、個々の教員が次年度のシラバス作成の際に反映させるよう、教務委員会の指示のもとで徹底させている。

【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でＳを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・「2020 年度キャリアデザイン学部内部質保証・自己点検チェックシート」（「授業評価アンケートの活用〔春・秋学期〕」の項目）

（２）長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容	点検・評価項目
・体験型科目群は本学部のカリキュラムの主要な柱のひとつであるが、多様な実習コースを含んでいることからその輪郭や位置づけ、成績評価基準等がやや曖昧になっていたため、2020 年度を通して体験型主任のイニシアチブのもとでワーキンググループが検討を重ね、科目の趣旨や内容を整理・改善し、2022 年度からの運用につなげた。	

（３）問題点・課題

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容	点検・評価項目
・キャリアデザイン研究に必要な調査スキルの習得のために、「キャリア研究調査法入門」（１年次必修）→「キャリア研究調査法（質的／量的）」（２年次選択必修）→「キャリア研究調査法実習」（展開科目）という順次性・階梯性をそなえたカリキュラムを設定しているが、その成果が演習や卒業論文にどのように反映されているかの検証が不十分であったため、2021 年度の検討事項としている。 ・グローバル化に対応した外国語習得の必要性やデータサイエンスの重要性が叫ばれているものの、市ヶ谷基礎（ILAC）科目の外国語科目や情報関連科目の履修状況が芳しくないため、履修ガイダンス等を通じてより積極的なアピールを試みていく予定である。	

【この基準の大学評価】

キャリアデザイン学部では、すべての項目にわたって満足すべき取り組みが行われている。とくに、1 年次から 4 年次にいたる学修の順次性・体系性に配慮したカリキュラムの一貫性が保たれている点、および、学部教育の主要な柱ともいうべき体験型科目群（選択必修）を充実させることで、理論と実践にもとづく統合的な学びの機会が保証されている点が高く評価できる。4 年次に履修する「卒業論文」や「キャリアデザイン学総合演習」が学部教育の集大成として明確に位置づけられていることも、科目の順次性や階梯性に配慮した教育の実現に寄与している。初年次教育・高大接続への目配りも充実している。一方、「問題点・課題」として、市ヶ谷基礎（ILAC）科目の外国語科目や「情報処理演習」への学生た

※注１　回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
※注２　回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

ちの関心がかならずしも高くない現状がある。新入生ガイダンス等の機会を利用して、それらの科目への強力なアピールに努めていくとともに、原因の詳細な分析にもとづく組織的な取り組みが求められる。なお、1.1.⑤の項目には、学生の国際性を涵養するための科目が複数設置されていることが記されている。それとうまく連動させながら市ヶ谷基礎(ILAC)科目の外国語科目に対する学生たちの関心を高めるような方策を考えてみることも必要である。また、項目 1.2.②には、2020 年度の学生のゼミ所属率が 86 パーセントであることが報告されているが、ゼミ所属率の経年変化の調査とあわせて、ゼミに所属する学生の割合を維持・向上させるための方策の検討にも期待したい。

2　教員・教員組織

【2021 年 5 月時点の点検・評価】

（1）点検・評価項目における現状

2.1　教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。

①学部（学科）内のＦＤ活動は適切に行なわれていますか。　S　[A]　B

【ＦＤ活動を行うための体制】※箇条書きで記入。

・年 3 回（年度はじめ、秋学期開始時、年度末)、執行部が招集し、サバティカル中を除く全専任教員、キャリアアドバイザー、学務主任が参加する FD ミーティングを開催している。

・内部自己点検・質保証委員会（各領域から１名ずつで構成）が、執行部とは独立したかたちで第三者的に学部運営について点検・評価を行い、適宜改善提案を行っている。

・毎月開催される教務委員会（各領域から１名ずつ、英語担当教員、体験主任、キャリアアドバイザー、学務事務１名で構成）が、年間を通じて授業に関わる FD を担当している。

【2020 年度のＦＤ活動の実績（開催日、場所、テーマ、内容（概要)、参加人数等)】※箇条書きで記入。

・年度はじめ（2020 年 4 月 10 日)、秋学期開始時（9 月 18 日)、年度末（2021 年 2 月 26 日）の合計３回、FD ミーティングを開催（2020 年度はオンラインの Zoom 会議)。各回、学部長による学部の現状や課題についての総括に続き、①カリキュラム関係、②学部内各種委員会、の２部構成で、配布資料をもとに、それぞれの代表担当教員から報告がなされ、情報共有と意見交換を行った。

・主要科目（基礎ゼミ、入門系科目、体験型科目、調査法関連科目、語学、演習、等）や、学部内の主な活動（学部シンポジウム、法政大学キャリアデザイン学会研究会、キャリアアドバイザーによる学生支援、等）について、年度末に「内部質保証・自己点検チェックシート」に各担当教員が記入し、年間の振返りを行った。

・上記チェックシートをもとに、執行部および各担当教員が「2020 年度中期目標・年度目標達成状況報告書」において自己評価を行い、その結果について内部自己点検・質保証委員会が達成状況を確認・評価し、併せて改善のための提言を第３回 FD ミーティングの場で行った。

【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でＳを選択した場合に具体的な内容を記入

特になし

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入

・2020 年度第１～３回 FD ミーティング資料および議事録

・「2020 年度キャリアデザイン学部内部質保証・自己点検チェックシート」

・「2020 年度中期目標・年度目標達成状況報告書」

②研究活動や社会貢献等の諸活動の活性化や資質向上を図るための方策を講じていますか。　S　[A]　B

※取り組みの概要を記入

・学部の研究や教育における重要なテーマのひとつが他者のキャリア形成の支援であることから、学部内ではピアサポーターの育成を積極的に推し進めるとともに、体験型科目や多くの演習（ゼミ）において、学外の小学校～高校、民間企業、NPO、文化施設等、社会の様々な組織やコミュニティと連携してフィールド活動を展開している。

・「学生活動サポート助成」の制度を通して、学生たちが学外で様々な社会貢献活動を実施する後押しをしている（法政大学キャリアデザイン学会より支出。毎年 10 件強、１件あたり 10 万円程度を助成)。

・キャリアデザイン研究を推進するために、法政大学キャリアデザイン学会が年６回の研究会を主催し、外部にも広く公開してアカデミックな成果の社会還元を図っている。

・法政大学キャリアデザイン学会による「研究プロジェクト助成事業」を通して、教員が協働して研究を実施する支援を行っている（年 20 万円、３年間継続)。

・学部紀要を年１回、法政大学キャリアデザイン学会紀要を年２回発行している。いずれもホームページ上で公開し、研究の成果を広く社会に発信している。

【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でＳを選択した場合に具体的な内容を記入

「学生活動サポート助成」の活用を低学年の学生たちにも広げるために、積極的に広報を行った結果、１年生のグループからも応募があった。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入

・法政大学キャリアデザイン学会「研究会実績一覧」
http://cdgakkai.ws.hosei.ac.jp/wp/group/
・『法政大学キャリアデザイン学部紀要』第 18 号（2021 年 3 月刊行）
http://cdgakkai.ws.hosei.ac.jp/wp/category/s_annals/
・法政大学キャリアデザイン学会紀要『生涯学習とキャリアデザイン』18-1 号（2020 年 11 月刊行）
http://cdgakkai.ws.hosei.ac.jp/wp/category/a_annals/

③組織編制やＦＤ等に関して、COVID-19 への対応・対策を行っていますか。行っている場合は、その内容を教えてください。

※取り組みの概要を記入

・感染症対策のレベルに応じて、どの授業を対面またはオンラインで実施するかについて、予め学部のガイドラインを定め、兼任教員や学生たちにも周知することによって、混乱が生じないように取り計らっている。
・カリキュラムの中に実習系の科目を多く含むことから、対面での授業が不可欠の科目や学外での実習を伴う授業については、その都度学部に届け出をして、学生たちの行動範囲を把握するよう努めている。
・教授会や FD ミーティングの機会に、オンライン授業における課題を共有し、対応策について意見交換を行っている。また学部教員のグループウェアであるサイボウズ上でも常に最新の情報共有に努めている。
・学部の自己点検・質保証委員会による恒例の学生対象モニター調査において、2020 年度に引き続き 2021 年度も、オンライン授業に関してより踏み込んだ聞き取り調査を実施する予定である。
・2021 年度より、教務委員会の中にオンライン担当委員（主副２名）を新たに設け、教育活動上の様々な課題を集約し、対応策の提案を行うとともに、コロナ終息後も見すえて、中長期的にオンラインの活用について検討することにしている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入

・「2020 年度中期目標・年度目標達成状況報告書」
・「2021 年度中期目標・年度目標」（「重要目標」の項目）
・2020 年度第２回 FD ミーティング資料「2020 年度秋学期に向けて」（2020 年 9 月 18 日）
・2020 年度第 11 回教授会資料（資料番号 B02）「学生に対するモニター調査の概要とインプリケーション（速報）」（2020 年 11 月 27 日）
・「2020 年度キャリアデザイン学部内部質保証・自己点検チェックシート」
・2021 年度第２回執行部会議資料「オンライン担当メモ」（2021 年 4 月 23 日）

（2）長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容	点検・評価項目
・小規模学部であることの利点を生かし、教授会や FD ミーティングにおける議論やグループウェア上での情報共有が密に行われ、FD 活動における PDCA サイクルが円滑に進められている。コロナ禍で生じた様々な課題に対しても、速やかで柔軟な対応が可能となっている。	

（3）問題点・課題

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容	点検・評価項目
・後任の補充が無いタイプの教授職における定年退職が続いた結果、専任教員の総数が減り、学部運営におけるマンパワーの再配分が求められている。各種学内委員会の構成人数の見直しを図るとともに、より効率的な運営のあり方を検討しているところである。また、大学院担当教員に大き	

な負担がかかっていることから、学部と大学院のあいだの連携についても再考を始めたところである。	

【この基準の大学評価】

キャリアデザイン学部では、カリキュラムの継続的な見直しや学習成果の検証を視野に入れた恒常的な取り組みが、学部の全教員を巻きこむかたちで展開されており、高く評価できる。また、年 3 回の FD セミナーの開催を通じて主要な科目の状況報告が行なわれ、問題点や課題の洗い出しを踏まえて有効な改善策につなげるというサイクルが確立されていることも評価に値する。学部の内部自己点検・質保証委員会が、執行部から独立したかたちで学部運営に関する点検や評価、改善にむけた提言を行なっている点も高く評価できる。教務委員会のなかにオンライン担当委員を設け、コロナ禍における具体策の提言のみならず、コロナ収束後を見据えた中長期的なオンライン活用の方途を探るための検討作業を進めている点も特筆に値する。一方、「問題点・課題」には、「後任の補充がないタイプの教授職における定年退職がつづいた結果、専任教員の総数が減り、学部運営におけるマンパワーの再配分が求められている」との記述があるが、専任教員の総数減は学部の運営に好ましからざる影響を与えることが懸念される。この点についての改善策の検討が望まれる。

3　その他の基準の COVID-19 への対応

【2021 年 5 月時点の点検・評価】

（1）点検・評価項目における現状

3.1　その他、学生支援や学生の学習環境や教員の教育環境整備、社会貢献における COVID-19 対応・対策を行っているか。

①その他、学部として学生支援や学生の学習環境や教員の教育研究の環境整備、社会貢献等における COVID-19 への対応・対策を行っていますか。行っている場合は、その内容を教えてください。

※取り組みの概要を記入

新入生を中心に、学生たちの登校の機会を少しでも多く設けるために、届け出制によって対面授業の選択を増やすよう努力している。また、キャリアアドバイザーとも協力しながら、実習系授業におけるオンライン併用の体験学習に関して様々な工夫を凝らしている。

【根拠資料】

・「2020 年度キャリアデザイン学部内部質保証・自己点検チェックシート」
・「2020 年度中期目標・年度目標達成状況報告書」
・「2021 年度中期目標・年度目標」（「重要目標」の項目）

【この基準の大学評価】

キャリアデザイン学部では、新入生を中心に、学生たちの登校の機会を少しでも多く確保するために、届け出制によって対面授業の選択を増やすなど、さまざまな制約が課されているなかで可能なかぎりの対応を行なっている点が高く評価できる。また、キャリアアドバイザーとも協力しながら、実習系の授業におけるオンライン併用の体験学習に関してさまざまな工夫を凝らしていることも報告されており、コロナ禍に起因するさまざまな問題へのスピーディーかつ柔軟な対応が模索されている点も評価に値する。

Ⅲ　2020 年度中期目標・年度目標達席状況報告書

No	評価基準		教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
1	中期目標		2017 年度から実施している教育課程の効果を検証し、必要に応じてカリキュラム内容の検討を行う。
	年度目標		①2018 年度から実施 する「キャリア体験学習（国際・台湾）」が二年度目にあたることから、引き続きその実施状況の把握、点検を行う。
	達成指標		2020 年度の実施プログラムについて、執行部、国際交流委員会等が連携してプログラムの実施状況の把握につとめ、教授会での共有を図る。とくに 2020 年度より担当教員が変更になることから、堅実な業務の引継ぎをはかりながらプログラムを滞りなく進めていく。
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A

※注 1　回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
※注 2　回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

		理由	新型コロナ対応で、春学期はZoom、秋学期はZoomと対面での授業の実施となった。台湾での体験学習ができないことの代替として、台湾とオンラインでつないだ講演会、学生交流、企業訪問を行い、国内での台湾関係機関へのフィールドワークを実施した。担当交代に伴う業務の引継ぎを行い、国際交流委員会と連携しつつ、教授会で実施状況を報告した。
		改善策	夏の台湾における体験学習の実施が難しいと思われるため、本年度実施した台湾とオンラインでつなぐ交流活動および国内でのフィールドワークのさらなる充実を図る。また、秋学期において短期の台湾での体験学習を実現する可能性を探る。
		質保証委員会による点検・評価	
		所見	春学期開始直前の段階において、台湾への渡航を中止することが決定された状況下、出来るかぎりの対応は行ったと評価する。とくに、本年度は担当者の交代時期とも重なったことから、追加的な労力を必要としたと思われる。かかる観点からも担当者の真摯な取り組みを評価したい。
		改善のための提言	本年度、本学では大部分の授業をオンラインで実施したことから、学生および保護者の不満は高まっている。来年度は、オンラインという制約は続く可能性が高い中、リアルな交流に近づけた機会をいかに創造するかが課題になる。
No	評価基準		教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
2	中期目標		2017 年度から実施している教育課程の効果を検証し、必要に応じてカリキュラム内容の検討を行う。
	年度目標		②2018 年度で終了した「多文化社会における日本語教育」等の日本語教育関連科目 6 コマ（半期）に代わって新規に設定した科目「キャリア研究調査法実習」について、昨年度に引き続きその実施状況の把握、点検を行う。
	達成指標		2019 年度から実施された科目「キャリア研究調査法実習」について引き続き、執行部、教務委員会等が実施状況を把握し、教授会で共有する。
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	2019 年度の「キャリア研究調査法実習」は春学期 3 コマ、秋学期 3 コマの開設であった。春学期にキャリア調査研究法（量的調査・質的調査）を履修したうえでキャリア研究調査実習を履修する学生が多いとみられ、春学期開講コマで 10 人未満のコマが 2 コマ見られた。そこで 2020 年度は春学期 2 コマ、秋学期 4 コマと配分を見直し、開講曜日・時間帯の見直しも行った。その結果、2019 年度の受講生が 77 名であったのに対し、2020 年度の受講生は 106 名に増加した。一方で、開講曜日・時間帯を変更していない秋学期の 2 つのコマにおいて、受講者が 10 人未満へと減少した。
		改善策	開講期・曜日・時間帯の変更の効果は見られるが、受講者が減少したコマを中心に、引き続き、受講状況を見ながら時間割編成を含め、検討を加えていく。
		質保証委員会による点検・評価	
		所見	まず、2019 年度の状況を踏まえ、本年度の時間割編成において工夫を凝らした点は評価したい。ただし、それでもなお受講者が少ない点をみる、供給超過に陥っている懸念は否めない。この点は、本授業を構想した段階においても指摘されていただけに、引き続き注視が必要である。とはいえ、本年度はコロナ禍に伴うオンライン授業の実施が、学生の履修行動に影響を及ぼしている可能性がある。したがって、数年の経過観察は必要と考えられる。
		改善のための提言	履修者数の経年変化をデータベース化し、今後の判断の基礎となるエビデンスを構築していく必要があるだろう。
No	評価基準		教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
3	中期目標		2017 年度から実施している教育課程の効果を検証し、必要に応じてカリキュラム内容の検討を行う。
	年度目標		③2019 年度見直した履修者数が少ない情報処理演習についてその後の経過観察を行っていく。
	達成指標		2019 年度から見直された科目「情報処理演習」について執行部、教務委員会等が実施状況を把握し、教授会で共有する。

※注１　回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
※注２　回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	2019 年度の情報処理演習は春学期 4 コマ、秋学期 4 コマの計 8 コマ展開で合計 133 名の受講者であったが、10 人未満のコマが 5 コマ存在し、2020 年度に春学期 4 コマに集約を行った。その結果、合計受講者数は 81 名となり、10 人未満のコマは 1 コマに減少した。集約の成果は出たものと考えられる。
		改善策	教職に必要な科目であるため、受講者数だけでの判断はできないが、引き続き受講状況を確認し、ILAC との情報・意見交換を続けていく。
		質保証委員会による点検・評価	
		所見	コマの集約により、10 人未満のコマが減少した点は、評価できる。ただし、合計受講者数はなお減少の一途を辿っている。データサイエンス分野が台頭する中、情報処理技術はその中核を形成し、学生のニーズが高まっていると考えられる中、受講者が減少し続けている点はその内容の適否の検討が必要かもしれない。
		改善のための提言	受講者数の推移について、今後も経年変化を観察していく必要がある。加えて、授業内容は、現代社会のニーズに適合したもになっている否かについても踏み込んだ検討が必要だろう。
No	評価基準		教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
4	中期目標		2017 年度から実施している教育課程の効果を検証し、必要に応じてカリキュラム内容の検討を行う。
	年度目標		④グローバル化に対応し、英語能力を有する人材育成を行う。
	達成指標		2019 年度に引き続き英語担当教員を中心に、カリキュラム、学生の学習能力向上に向けた取り組みの検討を始める。
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	B
		理由	オンライン授業を行う上で必要な情報等を載せた冊子を ILAC 英語分科会のカリキュラムモニター委員とともに作成し、兼任講師に配布した。また必修英語（リーディング系、表現型の 2 種類）については、クラス分けが確定するまでの 4 回分の授業の共通教材を、英語分科会の科目担当者とともにそれぞれ作成し、兼任講師へ配布・フォーマットにもとづいたフィードバックを依頼をするなどの対応をした。 キャリアデザイン学部の英語科目は他学部に比べても、兼任講師の占める割合が特に高いという事情がある。そのため、上記のような兼任講師全体への対応の他、学習支援システムなどに苦手意識を持つ兼任講師に対しては、オンライン授業に関わる相談をメールや電話等で行い、個別の対応を行うことで、授業運営に支障がでないように努めた。 学部の自己点検・質保証委員会により、11 月 20 日に 1～4 年生計 11 名を対象としたオンラインのモニター調査が実施され、第 11 回教授会でその結果が報告された。1 年生の必修英語に関しては、標準化（例えばオンラインであれば Zoom にするなど）が必要なのではという意見が出された。この点については、兼任講師の状況や事情も様々であるため、現状では一律にすべての兼任の先生に同様の授業形態でお願いするのは難しい。どのようなかたちで今後改善していくことができるのか、12 月の ILAC 英語分科会で課題を共有するとともに、この点については、今後も継続して検討することを確認した。 選択英語科目・学部専門科目については、履修者数の増加を目指す取り組みを行ってきたが、2019 年度は全体としてみると履修者数増は達成されたものの、特に上級レベルのクラスについては、増加の動きが鈍かったため、2020 年度はその対応を行うことを予定していた。年度の開始前には、選択英語科目のシラバスの作成についての学部としての要望を伝え、情報共有、クラスレベルのすり合わせを行った。 しかし、専任教員 1 名体制での対応というなかで、コロナ禍での緊急の対応により、当初予定していた取り組みを十分に進めることはできなかった。また、2020 年度の履修者数はオンライン授業の中でこれまで人数が多かったクラスも含め、全体として例年よりも少ない状況にある。この点については今後早急な対応が必要である。
		改善策	必修英語については、学部のモニター調査を受けて、きめ細かい対応を行うため、2021 年

※注 1　回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
※注 2　回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

			度より英語分科会の体制の変更を行う（科目責任者　英語分科会委員長→学部の英語担当教員へ）。また、来年度の必修英語の授業形態については、不確定な要素があるものの、学生とのコミュニケーションをしっかりとるように、引き続き対応を考えていきたい。 選択英語については、通常、新規の教員の場合、その年の履修者数が減るという傾向がこれまで見られてきた。そのため、来年度は、選択英語や学部専門科目については、同じ講師に担当をお願いすることを基本としつつも、兼任講師の退職やスケジュールの都合上変更が避けられない場合については、可能な限り、他学部での実績のある教員を充てるなど適切な講師配置となるよう調整している。 今年度、新入生のオリエンテーションの対面での実施の中止に伴い、選択英語や学部の専門科目の直接の説明ができなかった。説明文書は配布したものの、大学生活が始まる前の配布文書だけでは、十分な周知・理解がされていない可能性がある。履修者数増に向けての対応としては、3 月に新 2 年生に対して、選択英語・学部の専門科目の説明を行う予定である。また、新入生に対しても、必修英語以外の科目の履修を促す方法を検討する。
		質保証委員会による点検・評価	
		所見	春学期開始直前において、突然、オンライン授業の実施が強制されたこと、および、オンラインのリテラシーが十分ではない兼任講師が多いことを念頭に置くと、それこそ出来るかぎりの対応が行われたものと評価する。また、兼任講師への連絡、支援活動には、多大な時間と労力を要したであろうことは想像に難くなく、一年間、重大な事故等が生じることなく、学期を終了できたことを評価したい。
		改善のための提言	本年度、語学授業への対応が福井先生に依存し過ぎることになった点は学部として留意すべきである。本問題を教務委員会はもとより、FD などの機会で全教員で共有し、本問題に対する教授会構成員の問題意識を醸成する取組みは必要だろう。2021 年度は対面授業が実施されると見込まれているものの、コロナの感染拡大への懸念は予断を許さない。引き続き授業の実施の実態を教務委員会を中心に教員間で共有しつつ、「対応できること」と、（教育資源の不足により）「対応できないこと」とを適宜識別、対応していく必要がある。
No	評価基準		教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
5	中期目標		100 分授業の教育効果を高めるための教育方法について検討する。
	年度目標		2020 年度春学期は、新型コロナ感染防止対応の観点から実施された授業のオンライン化に適切に対応すべく、教員の実施する教育方法についての取組状況と課題を共有し、教育方法の改善を進める。
	達成指標		教務委員会を中心に取り組み状況を把握し、FD ミーティングで状況を共有し、改善に向けた課題、授業の質を保証するための方策を検討する。
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	2020 年度当初より、学部教員のオンライン共有サイト（サイボウズ）にて、オンライン授業で使えるツールの情報や、オンライン授業実施上の工夫や注意点などの情報を共有した。また、秋学期のオンライン授業開始を控える 9 月 18 日の第 2 回 FD 会議において、春学期に大人数のオンライン授業を担当した教員の知見や課題をフリートーク形式で共有した。 さらに、学部の自己点検・質保証委員会により、11 月 20 日に 1～4 年生 11 名を対象としたオンラインのモニター調査が実施され、第 11 回教授会（2020 年 11 月 27 日）にその結果が報告された。Zoom を用いた双方向型のオンラインではチャットの活用により教室での対面授業よりも有意義であるとの意見もあったが、当初からオンライン授業となった 1 年生への学部としてのよりきめ細やかな対応の必要が指摘された。それを受けて、2020 年 12 月～2021 年 1 月のゼミに 1 年生の見学の機会を設けることとなり、2020 年 12 月に大学で対面形式で行われた 1 年生対象のキャリアデザイン café において、アナウンスがおこなわれた。実際の 1 年生のゼミ見学の延べ参加人数は 118 名であり、希望する学生に機会を提供できたと考えられる。
		改善策	2021 年度は対面授業とオンライン授業が並行して行われる予定であるため、新たな課題が生じる可能性があり、継続的な観察が必要である。また、オンライン授業で双方向性を欠く授業について不満が見られたことから、学部として、より満足度の高い授業の実施方法につ

※注１　回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
※注２　回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

			いて、さらに情報共有と意見交換を進めていく。
		質保証委員会による点検・評価	
		所見	春学期の開始直前の段階において、オンライン授業の全面実施を大学が決定して以降、教務委員会には不規則にして未知の緊急の判断が求められる中、同委員長を中心に、適切かつ出来るかぎりの対応が行われたと評価したい。また、秋学期以降、1 年生をはじめ対面機会に渇望を覚える学生に対する支援に対しても、労苦を惜しまず、積極的に対応した点も評価する。
		改善のための提言	教務委員会は、授業運営の中核を担う機関であるが、2021 年度もコロナ禍が継続すると見込まれる中、業務過多になる可能性が大きい。コロナ禍における大学の対応に対して保護者、学生の不満がくすぶる中、2021 年度は、「コロナ禍」という言葉はもはや免罪符にはなりえないであろう。こうしてみると、対面、非対面の授業のあり方には一層の検討やモニタリングが必要不可欠であって、同委員会の能力を超えてしまう懸念がある。その対応として、教務委員会内部において、オンライン授業責任者を設定し、オンライン授業の標準化等の構想・実施、および、モニタリングに責任を負う担当者を設けることは一案である。
No	評価基準		教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
6	中期目標		本学部の教育目標を達成するとともに、その教育成果を発信する。
	年度目標		①就職支援を充実させ、大学のキャリア支援策をリードする。
	達成指標		学部の特色を活かし、キャリアセンターとの連携を取りつつキャリアデザインという観点から学部独自の就職支援策を実施する。
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	対面の就職活動支援が大幅に制限される中で、オンラインによる支援活動を行った。第一に、キャリアアドバイザーにするオンライン個別相談を募集した。第二に、12 月のお昼休みに合計三回、「富士見坂シュウカツラジオ」というオンラインによる就活情報提供を行った。内容は、1 回目（就活準備について）、2 回目（エントリーシートについて）、3 回目（面接について）であり、2,3 回には、就職情報会社の方にゲストとして参加してもらった。なお、昨年度まで取り組んでいた社会人との対話イベント（さし飯体験プログラム）については、その内容が「キャリアデザイン研究」（日本キャリアデザイン学会）に掲載された。
		改善策	2020 年度は、オンラインのイベント準備が遅れて、秋学期の開催になったが、2021 年度のオンライン就活イベントは春にも開催できるように準備をする。もちろん、対面での支援も状況を考慮しつつ、計画する。
		質保証委員会による点検・評価	
		所見	コロナ禍において、適切にオンラインでの対応を行ったと評価できる。第一の点について、キャリアアドバイザーの活用の仕方が個別相談を中心に適切であり、従来の年度通りの相談機会を確保できている。第二の点については、情報提供を例年通り実施したことは、オンラインでのハンデを感じさせないものであった。また、さし飯体験プログラムの記事が学会誌に掲載されたことは、本学部の活動を世に示すものであった。
		改善のための提言	対面での対応を増やすこと、それとオンラインでの対応を早期に行う必要がある。また 2020 年度の就職状況を振り返り、21 年度の反省材料にすることも有意義であろう。
No	評価基準		教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
7	中期目標		本学部の教育目標を達成するとともに、その教育成果を発信する。
	年度目標		②体験型科目に関しては、成果の可視化に取り組む。
	達成指標		体験型科目の成果報告集の作成、ポスターセッションの実施等により、多様な体験の内容を発表する機会を設ける。さらにキャリア体験学習（国際）についてはその成果を学部 HP 等を通じて全学にも発信していく。
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	授業のなかでの成果報告とあわせて、必要に応じて成果報告集の作成も行った。ポスターセッションについては学内施設の使用制限のもと、日台教育センターなど外部施設での展示

※注 1　回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
※注 2　回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

			を行った。キャリア体験学習（国際）については、コロナ禍により海外実習が中止となりイレギュラーな授業運営となったことから、学部 HP の更新はコロナ禍収束後に検討することとした。
		改善策	成果報告の最適な媒体（既存は紙媒体）について検討を行う。また、コロナ禍収束後に、キャリア体験学習国際）の成果を学部 HP 等を通じて全学に発信していく。
		質保証委員会による点検・評価	
		所見	コロナ禍で諸制限のかかる中、一定の成果を上げたことが評価される。授業と成果報告集は例年通り当然ながら、ポスターセッションでは外部施設での展示を行ったことは評価できる。
		改善のための提言	キャリア体験学習（国際）の海外実習が中止となったことを 2021 年度においていかに対応するかが、課題の一つである。また、学部 HP の更新も、2021 年度に状況を見ながら行う必要がある。
No	評価基準		学生の受け入れ
8	中期目標		入学センターと連携しながら、定員管理の適正化及び入学者の質の向上に努める。
	年度目標		①入学者の定員管理を厳格に行う。
	達成指標		2019 年度に引き続き特別入試と一般入試の入学者の割合を考慮しつつ、適切な水準の入学定員の充足を図る。
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	入学者数の決定は 3 月末まで可変的だが、1 月末時点の入試委員会での入学手続き状況では、特別入試入学者数は 2020 年度入試よりも減少している。とりわけ自己推薦入試については、2021 年度入試から出願基準が厳格化したことにより、志願者、合格者とも減少した。
		改善策	2022 年度入試も引き続き特別入試と一般入試の入学者の割合を考慮しつつ、適切な水準の入学定員の充足を図る。とりわけ、一般入試での査定に加えて、自己推薦入試、2021 年度から開始された予算定員増に伴う留学生対象指定校（いわゆる外枠）の査定についても引き続き慎重に取り組んでいく。
		質保証委員会による点検・評価	
		所見	執行部が指摘するように、1 月末時点での過年度より減少した点を客観的に分析することは重要である。とりわけ自己推薦入試に関して、出願基準が厳格化したことは、単なる人数の減少を反省材料とするのでなく、学生の質の担保を深慮した上での結果と評価できる。
		改善のための提言	これまで通り、特別入試と一般入試の入学者の割合を考慮しつつ、適切な水準の入学定員の充足を図ることは必須である。それに加え、自己推薦入試や留学生対象指定校の査定については、これまでの考慮を引き継ぐ形で慎重に行う必要がある。
No	評価基準		学生の受け入れ
9	中期目標		入学センターと連携しながら、定員管理の適正化及び入学者の質の向上に努める。
	年度目標		②指定校、特別入試に関して、入学者の状況を適切に判断し、制度内容等についての検討を行う。
	達成指標		2019 年度に検討した一般入試への英語外部試験の導入及び特別入試の募集条件と選考方法の改定にを踏まえた入試を適正に実施する。また自己推薦の試験趣旨の選考過程での明確化、指定校入試における志願状況や入学後成績の分析を踏まえた指定校との緊張感ある関係づくりなどに継続的に取り組む。
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	2019 年度に検討した一般入試への英語外部試験の導入及び特別入試の募集条件と選考方法の改定にを踏まえた入試は適正に実施された。自己推薦の試験趣旨の選考過程での明確化により、応募者数が絞り込まれ、趣旨に合致した、より丁寧な選考が可能になった。指定校入試については、予定していた大幅なリストラクチュアリングは、コロナ禍によって手控えたが、入学後成績分析データの蓄積、指定校とのコミュニケーションは実施した。
		改善策	指定校の数が、指定校入試の査定枠をだいぶん上回っているため、これまで蓄積されてきた

※注１　回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
※注２　回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

			入学後成績分析データ、指定校とのコミュニケーションの結果、さらには、コロナ状況の注視をふまえて、指定校のリストラクチュアリングに取り組んでいく。
		質保証委員会による点検・評価	
		所見	一般入試への英語外部試験の導入に加え、特別入試における諸改定を実践した今年度入試は、適正に実施されたと評価できる。理由の１つとして、応募者数が減少したことが挙げられるが、これは本学部に従来以上に適した受験者が応募するようになったことを意味していよう。指定校入試に関しては、例年通り、入学後成績分析データの蓄積、指定校とのコミュニケーションは実施したことは評価できる。
		改善のための提言	指定校入試における大幅なリストラクチュアリングについては、提案のとおり、エビデンスに基づく検討を期待する。
No	評価基準		学生の受け入れ
10	中期目標		入学センターと連携しながら、定員管理の適正化及び入学者の質の向上に努める。
	年度目標		③入学希望者に対しては、アドミッションポリシーの理解を高めるために、学部としての情報発信の効果的な方法を検討する
	達成指標		学部広報として、ゼミ紹介等の動画配信をさらに増加させるとともにインターネットを活用した広報への取り組みを重点化する 。また、学部シンポジウムの充実を図る。
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	入学希望者への情報伝達手段としての学部 youtube チャンネルの運用は、着実に効果をあげている。現在公開している動画は 21 本。学部紹介動画は視聴回数 7736 回。総視聴回数は 62106 回となった。2020 年度は特に動画の視聴回数が伸びており、これまで計画的に着手してきた動画広報の成果が出ている。その半面でコロナ禍の影響で学部連続シンポジウムの実施を見送った。
		改善策	次年度は、オンライン開催を含めて、シンポジウムは開催する。そのための準備をすすめていく。学部動画については、予算を確保できる場合には制作会社に発注して、動画を作成する。予算確保が難しい場合には、教員の協力を募り、インタビュー・メッセージ動画を公開していく。
		質保証委員会による点検・評価	
		所見	入学希望者への学部 youtube チャンネルが、一定の効果をあげていることは、作成された動画の本数や、視聴回数に表われていると評価できる。コロナ禍において、特に本年度は動画のニーズが増えた社会情勢に、適切に応えたものと評価できる。
		改善のための提言	学部シンポジウムの中止に関しては、2020 年度はやむを得ないと考えられる。これは本学部のみならず、他大学等においても次年度に持ち越す課題であろう。早めに準備を進め、実施に向けたスケジュールやプランを組むことが必要である。
No	評価基準		教員・教員組織
11	中期目標		3 つの領域の教員バランスに配慮し、教員の多様性を確保することに留意し、適切な教員の任用を行う。
	年度目標		2020 年度から専任教員が 1 名減となることを踏まえ、適切な教員配置について検討する。
	達成指標		学部教育、資格課程、大学院教育における教員の配分の現状分析を執行部・教務委員会を中心に行い、必要に応じて配分の変更について検討を進める。
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	2020 年度末定年退職者の後任人事では、学部教育、教職・資格課程、大学院の三分野を指導できる教員を採用することができた。なお、本学部は大学全体の資格課程・教職課程の主管学部であるため、それらと学部教育、大学院教育とのバランスの在り方については今後の継続的検討課題である。
		改善策	2021 年度も定年退職者後任人事を実施する予定であることから、募集要項の段階から、学部教育、資格・教職課程での教育、大学院教育のバランスを考慮した人事を検討する必要がある。

※注１　回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
※注２　回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

		質保証委員会による点検・評価	
		所見	おおむね望ましい形で行われた。2020 年度末定年退職者の後任の採用にあたっては、コロナ禍の影響もあり、対象者の選定だけでなく、その方法に関しても（面接は対面でするかオンラインでするかなど）、学部で多くの議論がなされた。スムーズに決定されたわけではないが、結果的には多くの議論がなされた結果として、多分野の業務を遂行可能な人材を選考することができた。
		改善のための提言	いつ定年退職者の後任採用人事が発生するかは、基本的には事前にわかっていることであり、十年規模の長期的な視野をもって計画を立てられればより良いであろう。また、その際には、学部以外の業務分担について、領域を超えた議論がなされていることが望ましい。
No	評価基準		学生支援
12	中期目標		学生支援の体制を整備し、多様な学生が意欲的に学べる環境を作る。
	年度目標		①外国人留学生に対する支援を充実させる。
	達成指標		「基礎ゼミ」クラス編成における工夫や「ラーニング・サポーター制度」を活用した留学生支援等を実施しつつ、留学生支援を充実させる。
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	留学生については、基礎ゼミクラス編成時に、日本人学生とのつながりづくりを支援する観点から１クラスに１名の配置とし、実際に一定の効果が認められた。 コロナ禍の影響で留学生と日本人学生の双方の大学生活が制約されたことから、今年度は「ラーニング・サポーター制度」を活用した留学生支援を実現できなかった。
		改善策	2021 年度以降については、留学生の増加が見込まれるため、基礎ゼミ１クラスに１名の配置とできるかどうか不確かであるが、クラス編成において可能な範囲で配慮・支援を行っていく。「ラーニング・サポーター制度」による留学生支援については、コロナ禍の影響や他の活動による制度利用ニーズなどを考慮しながら、引き続き実施可能性について検討していきたい。
		質保証委員会による点検・評価	
		所見	留学生に関しては、基礎ゼミでの支援では可能な範囲での支援が行われた一方で、ラーニング・サポート制度を活用できなかった点は課題として残っている。コロナの影響で来日できない学生が一定数いた。その学生に対して、基礎ゼミでは、各教員が創意工夫をこらした対応をしたが、学部全体での統一的なサポート体制づくりがあればなお良かったであろう。
		改善のための提言	2021 年度も、コロナ禍の影響で来日できない学生が一定数生じると見込まれる。基礎ゼミ以外の授業で、その学生に対する対応が、教員の裁量にゆだねられている点は看過できない学部の課題である。教務委員会等において、オンライン授業の遂行とモニタリングに責任を負う担当者を設定し、一元的、体系的な対応を図るのは一案である。
No	評価基準		学生支援
13	中期目標		学生支援の体制を整備し、多様な学生が意欲的に学べる環境を作る。
	年度目標		②キャリアアドバイザー制度の効果的活用を図る。
	達成指標		キャリアアドバイザー委員会が中心となって、キャリアアドバイザーの業務内容や業務フローを整理して、より効果的な体制のあり方を検討する。
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	コロナ禍への対応による長期に渡る授業等のオンライン化への対応が緊急の課題となったことから、キャリアアドバイザーの相談業務のあり方を検討し、従来対面で実施していた相談業務の電話ならびに zoom での実施やオンラインでの学生との懇談会等、相談体制ならびに相談フローの再検討を行った。再検討を通じて、従来対面で実施していた相談活動のチャネルが拡大し、効果的な相談体制が構築された。
		改善策	コロナ禍の影響も引き続き注視しながら、状況に応じて対面、電話、zoom など最適な選択肢を活用しながら、効果的な相談体制を目指す。
		質保証委員会による点検・評価	

※注１　回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
※注２　回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

		所見	コロナ対策として支援の実施方法を柔軟に開拓したことによって、コロナのない状況よりも学生にとって選択肢が増えるなど、プラスの効果が多く見られた。ただし、新入生は、アドバイザーと対面で接したことがないため、オンラインでの相談には一定の抵抗があった可能性もある。活用しやすくするためにさらなる工夫が求められる。
		改善のための提言	2021 年度のコロナの感染状況が十分に予測できるわけではないが、大学は対面授業の増加に向かっており、アドバイザーによる支援にも対面の選択肢が増えるであろう。コロナが仮に終息したとしても、2020 年度に増えたチャンネルを減らさないようにしつつ、アドバイザーの業務が過剰になることをさけるように、計画的な運用が望まれる。
No	評価基準		社会連携・社会貢献
14	中期目標		教育・研究を通じて社会貢献、社会連携を教育成果や研究成果を適切に社会に還元する。
	年度目標		②「人生 100 年のキャリア」についての社会的関心が高まる中で、学部のキャリア研究成果を社会に還元する。
	達成指標		法政大学キャリアデザイン学会ホームページの充実を図る。学会紀要、学部紀要のアーカイブを進め研究成果へのアクセスの容易化を実現する。あわせて大学のグローバル化涵養の観点からキャリア体験学習（国際）の学習成果を学部 HP 等を通じて大学全体に発信していく。
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	学会紀要は「オンライン化」し、 研究論文は、すべて電子ジャーナルで検索可能となっている。キャリア体験学習（国際）については、コロナ禍により海外実習が中止となりイレギュラーな授業運営となったことから、学部 HP の更新はコロナ禍収束後に検討することとした。
		改善策	学会 HP の充実とあわせて、不要印刷部数の削減に取り組んでいきたい。また、コロナ禍収束後に、キャリア体験学習国際）の成果を学部 HP 等を通じて全学に発信していく。
		質保証委員会による点検・評価	
		所見	コロナ禍により活動が制限されたことから、オンライン化が加速した一方で、対面を前提とする体験型の取り組みは十分にいかなかった面があることは否定できない。そのため、成果の開示にも制限がつかざるをえなかった。
		改善のための提言	研究成果の発信として、紀要なども、よりオンライン化することが望ましい。体験型の授業等に関しては、コロナ感染状況を見つつ、オンラインでも可能な社会貢献など、新しい選択肢を広げることが求められる。また、授業に限らず、ボランティア活動や学生活動サポート助成の状況など、教員、学生の様々な社会貢献の情報を集め、積極的に社会発信をしていく姿勢も必要であろう。

【重点目標】

入学センターと連携しながら、定員管理の適正化及び入学者の質の向上に努める。

【目標を達成するための施策等】

・2019 年度に検討した一般入試への英語外部試験の導入及び特別入試の募集条件と選考方法の改定を踏まえた入試を適正に実施する。また自己推薦の試験趣旨の選考過程での明確化、指定校入試における志願状況や入学後成績の分析を踏まえた指定校との緊張感ある関係づくりなどに継続的に取り組む。

【年度目標達成状況総括】

今年度から開始した一般入試への英語外部試験の導入により、897 名の志願者を確保し、学部としての一般入試の志願者増加に寄与することができた。特別入試については　とりわけ自己推薦の試験趣旨の選考過程での明確化により、応募者数が絞り込まれ、趣旨に合致した、より丁寧な選考が実現できた。指定校入試については、予定していた大幅な削減は、コロナ禍によって手控えたが、入学後成績分析データの蓄積、指定校とのコミュニケーションは実施することができた。

【2020 年度目標の達成状況に関する大学評価】

キャリアデザイン学部では、いずれの評価基準においても、目標の達成にむけた継続的な努力が払われ、満足すべき水準の達成がみられる。「教育課程・学習成果」の④については、コロナウイルス感染拡大により、オンライン授業の実施を余儀なくされたこと、キャリアデザイン学部の英語科目は他学部に比べ兼任講師の占める割合が著しく高いこと、学部所属の英語専任教員が 1 名のみであること、等々の事情から、さまざまな苦労があったことが推察される。「質保証委員会

※注１　回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
※注２　回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

による点検・評価」でも指摘されているように、業務遂行上のマンパワー不足を補うべく、教務委員会のみならず、学部全体でこの問題を共有し、継続的かつ効果的な取り組みをつづけていく仕組みづくりが緊要であろう。また、一般入試への英語外部試験の導入による志願者の増加や、自己推薦入試の趣旨に合致した丁寧な選考の実施など、「重点目標」に掲げられた施策はおおむね着実に実行に移されており、高く評価できる。今後は、特別入試と一般入試の入学者の割合を考量しつつ適正なかたちで入学定員の充足をはかることが望まれる。

Ⅳ　2021 年度中期目標・年度目標

No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
1	中期目標	2017 年度から実施している教育課程の効果を検証し、必要に応じてカリキュラム内容の検討を行う。
	年度目標	①2019 年度より日本語教育関連の科目に代って設置された「キャリア研究調査法実習」（計 6 コマ）の円滑な実施を図る。
	達成指標	20 年度に開講曜日・時限の見直しを行い、全体の受講者数は増加したが、依然として 10 人未満のクラスが 2 コマあるため、全クラスでの充足を目ざす。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
2	中期目標	2017 年度から実施している教育課程の効果を検証し、必要に応じてカリキュラム内容の検討を行う。
	年度目標	②2018 年度から開始された「キャリア体験学習（国際・台湾）」の担当教員が 2020 年度より交代したため、プログラムが滞りなく実施されるよう努める
	達成指標	2020 年度より新たな担当教員のもとでプログラムが実施されているが、引き続き体験型主任および国際交流委員会とも連携しながら確実な授業展開を図る。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
3	中期目標	2017 年度から実施している教育課程の効果を検証し、必要に応じてカリキュラム内容の検討を行う。
	年度目標	③2019 年度に「情報処理演習」の開講コマ数を見直した成果について、引き続き観察して改善に努める。
	達成指標	2020 年度にコマ数を 8 から 4 に集約し、10 人未満のクラスは 1 コマに減ったが、データサイエンスの重要性が高まるなかで、授業内容の適否についても ILAC や教務委員会と検討を進めていく。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
4	中期目標	2017 年度から実施している教育課程の効果を検証し、必要に応じてカリキュラム内容の検討を行う。
	年度目標	④必修英語および選択英語・学部専門科目としての英語の授業における、質の担保と履修者増を図る。
	達成指標	2021 年度より ILAC 英語分科会の体制変更に伴い、学部の英語担当教員のイニシアチブが高まることを生かして、よりきめ細かな学修のサポートに当たる。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
5	中期目標	100 分授業の教育効果を高めるための教育方法について検討する。
	年度目標	①オンラインと対面の併用の中で、学生たちが不利益を被ることなく学修を進めることができるよう努める。
	達成指標	教務委員会の中に新たに設置した「オンライン担当委員」を中心に、執行部とも連携しつつ受講状況のモニタリングや困りごとの把握・対応に当たる。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
6	中期目標	100 分授業の教育効果を高めるための教育方法について検討する。
	年度目標	②コロナ禍における体験型科目（キャリア体験学習、地域学習支援、キャリアサポート実習等）が、感染防止に配慮したうえで、十分な学修の成果を上げられるよう努める。
	達成指標	体験型主任を中心に、授業の実施状況を把握し、適宜教授会や FD ミーティングで共有するとともに必要に応じて改善策を検討する。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】

※注１　回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
※注２　回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

7	中期目標	100 分授業の教育効果を高めるための教育方法について検討する。
	年度目標	③「基礎ゼミ」や各領域の入門科目、調査法科目、体験型科目、英語科目等、兼任教員と分担している科目については、互いにコミュニケーションを密にして授業の標準化や質の保証に努める。
	達成指標	兼任教員との情報共有に留意するとともに、必要に応じてオンラインなどで懇談や振返りの機会を設ける。
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
8	中期目標	本学部の教育目標を達成するとともに、その教育成果を発信する。
	年度目標	①体験型科目については、引き続きその成果をわかりやすく可視化することに努める。
	達成指標	現在、ポスター発表や報告書作成など、さまざまな形式で成果報告が行われているが、コロナ後を見すえて、より効果的な発信のあり方も検討していく。
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
9	中期目標	本学部の教育目標を達成するとともに、その教育成果を発信する。
	年度目標	②「学生活動サポートプログラム」を、より多彩な学生が活用できるよう工夫する。
	達成指標	ゼミ単位に限らず、より広範囲な学生によってプログラムが実施されるよう制度を改めるとともに、成果の発信の方法についても検討を加える。
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
10	中期目標	本学部の教育目標を達成するとともに、その教育成果を発信する。
	年度目標	③調査法科目の全体像をより明確にし、学修の成果や活用のあり方について検証する。
	達成指標	「キャリア研究調査法入門」から「調査法実習」まで、階梯性や応用性が実現しているかモニタリングを行い、必要に応じて改善策を検討する。
No	評価基準	学生の受け入れ
11	中期目標	入学センターと連携しながら、定員管理の適正化及び入学者の質の向上に努める。
	年度目標	①入学者の定員管理を厳格に行うとともに、特別入試と一般入試の割合の妥当性について検証する。
	達成指標	2021 年度入試に導入した自己推薦の専願化および英語外部試験利用、外枠留学生について、入学者のモニタリングを通してその成果を検証するとともに、グローバル体験入試の定員の妥当性について検討する。
No	評価基準	学生の受け入れ
12	中期目標	入学センターと連携しながら、定員管理の適正化及び入学者の質の向上に努める。
	年度目標	②指定校入試による入学者数の適正化に努める。
	達成指標	過去の志願状況や入学者の成績分析等を踏まえて、指定校とのより緊張感ある関係づくりに取り組むとともに、いっそう厳密な選定を行う。
No	評価基準	学生の受け入れ
13	中期目標	入学センターと連携しながら、定員管理の適正化及び入学者の質の向上に努める。
	年度目標	③アドミッション・ポリシーに対する理解をさらに促すために、より有効な情報発信の方法を検討する。
	達成指標	入学希望者に向けてウェブを通じた広報をさらに推し進めるとともに、学部シンポジウムを有効に活用する。
No	評価基準	教員・教員組織
14	中期目標	3 つの領域の教員バランスに配慮し、教員の多様性を確保することに留意し、適切な教員の任用を行う。
	年度目標	①2020 年度より専任教員が 1 名減り、また恒常的にサバティカルで 2 名程度の教員が不在になることを踏まえて、学部運営に関わる業務のいっそうの効率化と平等化を図る。
	達成指標	サイボウズ等を活用して情報の伝達や共有、意見聴取等のスピード化、簡便化を図るとともに、学部教育、資格課程、大学院教育における教員負担の均等化を目ざして、執行部を中心に関係教員と検討を推し進める。
No	評価基準	教員・教員組織
15	中期目標	3 つの領域の教員バランスに配慮し、教員の多様性を確保することに留意し、適切な教員の

※注 1　回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
※注 2　回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

		任用を行う。
	年度目標	②領域ごとの人員配置や年齢構成を把握して、中長期を見すえた採用計画を立てる。
	達成指標	常設人事委員会と執行部を中心に、中長期採用計画の策定および定年延長や名誉教授の手続きの明確化に取り組む。
No	評価基準	学生支援
16	中期目標	学生支援の体制を整備し、多様な学生が意欲的に学べる環境を作る。
	年度目標	①就職支援を効果的に実施するとともに、学部独自のキャリア教育を推し進める。
	達成指標	キャリアセンターとの協働および差異化を意識しつつ学部独自のキャリア支援のあり方を検討する。
No	評価基準	学生支援
17	中期目標	学生支援の体制を整備し、多様な学生が意欲的に学べる環境を作る。
	年度目標	②外国人学生に対する支援を強化する。
	達成指標	国際交流委員会を中心にグローバル教育センターとも連携しつつ、留学生の学修支援により細やかに対応する。
No	評価基準	学生支援
18	中期目標	学生支援の体制を整備し、多様な学生が意欲的に学べる環境を作る。
	年度目標	③キャリアアドバイザー制度をより効果的に活用する。
	達成指標	キャリアアドバイザー制度運営委員会を中心に、コロナ禍に対応したより柔軟かつ多様な支援のあり方を検討する。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
19	中期目標	教育・研究を通じて社会貢献、社会連携を行い、その教育成果や研究成果を適切に社会に還元する
	年度目標	学部・大学院におけるキャリア研究の成果を、より広範かつ効果的に発信していくための方策を検討する
	達成指標	学部・学会紀要のオンライン化、アーカイブ化をさらに推し進め、より容易に研究成果にアクセスできるよう工夫するとともに、海外実習の再開後、キャリア体験学習（国際）の成果のウェブ上での発信に向けて検討を進める。

【重点目標】
オンラインと対面の併用の中で、学生たちが不利益を被ることなく学修を進めることができるよう努める。
【目標を達成するための施策等】
教務委員会の中に新たに設置した「オンライン担当委員」を中心に、執行部とも連携しつつ、受講状況のモニタリングや学生の困りごとの把握に務め、教授会やFDミーティングを通して学部全体で課題を共有し、対応に当たる。

【2021年度中期目標・年度目標に関する大学評価】

キャリアデザイン学部では、2021年度中期目標・年度目標の全般にわたって、「2020年度中期目標・年度目標達成状況報告書」の「質保証委員会による点検・評価」を踏まえた年度目標が設定されており、継続性に留意した一貫性のある取り組みの姿勢がうかがわれ、高く評価できる。また、教務委員会のなかに「オンライン担当委員」という新たな職掌をもうけることによって、現下のコロナ禍に柔軟に対応していく方針が打ち出されており、時宜を得た適切な施策として評価に値する。

【大学評価総評】

キャリアデザイン学部における「2021年度自己点検・評価シート」を読むと、学部の教育目標にもとづいた教育課程の編成・実施方針に沿った適切な科目配置がなされていることが見てとれ、高く評価できる。また、学部の就職委員会や学部所属の専門スタッフであるキャリアアドバイザーを中心に手厚い就職支援を提供する仕組みを確立するなど、キャリア教育を看板に掲げている学部の強みを生かしつつ、創意工夫に富んだ取り組みを積極的かつ継続的に行なっている点も評価に値する。また、コロナ禍という未曽有の事態を受け、柔軟かつスピーディーな対応がさまざまな局面で求められるなか、「2021年度中期目標・年度目標達成状況報告書」の「重点目標」には、時宜にかなった適切な方針が示されており、この点も特筆に値する。「目標を達成するための施策等」でも示されているとおり、「オンライン担当委員」を中心とした種々の活動が軌道に乗ることを期待したい。一方、「2020年度中期目標・年度目標達成状況報告書」の「教育課程・学習

※注1　回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
※注2　回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

成果」の年度目標②において、「質保証委員会による点検・評価」の「所見」として、時間割編成の見直しが一定の効果をあげているとの認識が示されるのと同時に、同科目のいわゆる「供給超過」の懸念が指摘されている。この点に関する組織的な検討が望まれる。

※注１　回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
※注２　回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。